

琉球大学学術リポジトリ

小・中・高校生に対する性教育の実態とその評価

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学教育学部 公開日: 2007-08-21 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 本多, 正尚, 小澤, 真希, 鈴木, 涼子, 湯本, 敦子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/1416

小・中・高校生に対する性教育の実態とその評価

本多正尚¹, 小澤真希², 鈴木涼子³, 湯本敦子⁴

Survey and Evaluation of the Current Sex Education for Elementary and High School Students

Masanao HONDA, Maki OZAWA, Ryoko SUZUKI, Atsuko YUMOTO

はじめに

性教育に対する関心は年々高まり、文部科学省あるいは地方自治体でも小学校、中学校、高等学校（以下小・中・高と略す）での積極的な導入を推奨してきた（e.g., 文部省, 1999）。ところが、性教育に対する指導要綱・性教育指針がまだ具体的ではなかったため、不十分な性教育につながる場合も少なくなかった。

また、近年初交の低年齢化も報告されている（日本性教育協会, 2001）。しかし、小・中・高においては、避妊の解説や性器の図など具体的な内容の教育に対しては依然批判も多い（e.g., 小田切, 1992）。また、性教育は学校のみならず、家庭でも当然行われるべきであるが、家庭の性教育については、学校以上に遅れていると思われる。

こうした問題に対処するには、小・中・高の児童・生徒の性や避妊に対する知識、学校・家庭での性教育の現状についての詳細な調査・研究は不可欠である。そこで我々は、大学生を対象に、小・中・高での性教育の実態に関して調査を行った。本研究の目的は、現在学校で行われている性教育、特に避妊教育の内容、満足度を把握し、今後の性教育を検討することである。

研究方法

1. 調査対象・期間・場所

ある大学で共通教育科目を受講する18歳以上の男女大学生370名を対象とした。調査は、2004年10月19日から10月27日に、同大学構内の教室で行った。

2. 調査方法

無記名自記式質問紙によるアンケート調査を行った。昼休みおよび放課後の教室内でアンケートの趣旨を説明し、同意を得られた者について、質問紙と封筒を配布した。回収については、記入した質問紙を封筒に入れてもらい、昼休みおよび放課後終了後に回収箱へ投函する方法と、後日郵送にて提出する方法の2種類を希望に応じて行った。前者については、回答終了後、出口に設置した回収箱に投函してもらった。後者については、切手を配布し、郵送してもらった。

3. 調査内容

質問項目は、性・年齢などの基本属性、学校や家庭での避妊教育の有無、時期、内容、評価などで構成された。

¹ 琉球大学教育学部自然環境教育コース

² 諏訪中央病院

³ 名古屋第一赤十字病院

⁴ 信州大学医学部保健学科

4. 解析方法

今回の調査での分割表の検定は、本来なら2元配置の分析を行うべきであるが、今回は基礎的なデータの解析に主眼をおいたので、フィッシャーの正確確率検定、 X^2 検定を用いた。また、データ数が少ない場合は、一部検定を省略した。

5. 倫理性への配慮

調査が任意であることを事前に説明し、質問に答えずにあるいは途中で放棄して退出しても、一部または全部を無回答で提出しても、個人的な不利益は発生しないことを説明した。また、調査は無記名であることを事前に説明し、調査結果が教育、研究目的での使用のみに限定され、個人が特定できるような形で回収、集計、保管、公表されることが一切ないことを明示した。同時に調査結果が厳重に保管される事を事前に説明し、教育、研究目的以外に公表されないこと、及び情報漏洩がないように万全を期することを明示した。教室での回収についても、回収箱や出口に調査者が立たないようにして任意性を確保した。さらに、授業終了後の配布・回収であったので、これらに教員は一切立ち会わないことによって、任意性が損なわれないように配慮した。

大学名についても倫理的な配慮から公表を控えた。

結果

1. 対象の特性

370名に配布し、そのうち355人からアンケートを回収し（回収率＝95.9%）、305人から有効回答を得た（有効回答率＝85.9%）。内訳は、男性151人（49.5%）、女性154人（50.5%）で、年齢は18歳から33歳、平均年齢19.2歳であった。学年別では1年生が最も多かった。

2. 避妊教育の実施状況

避妊教育を受けた場所を図1に示した。全体として避妊教育は、男性の93.4%、女性の95.5%が何らかの避妊教育を受けてきている。そのうち、学校のみで避妊教育を受けているのは、男性84.8%（128人）、女性82.5%（127人）であった。学

校と家庭の両方で教育を受けているものは、男性8.6%（13人）、女性13.0%（20人）であった。家庭教育のみで教育を受けたものはいなかった。学校、家庭の両方で教育を受けていないものは、男性7.8%（10人）、女性4.5%（7人）であった。

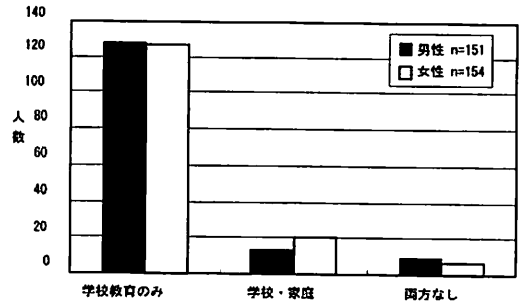


図1 避妊教育の有無と実施場所

さらに学校について避妊教育を受けた時期を詳しく調べ、図2に示した。男女ともに中学でのみ避妊教育を受けた者が最も多かった。

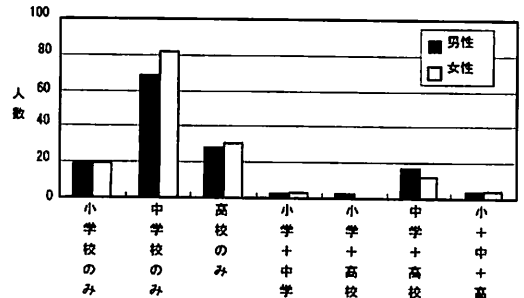


図2 学校での避妊教育の時期

学校で受けた避妊教育の種類を表1、2、3に示した。避妊教育の種類と、男性の実施時期（フィッシャーの正確確率検定、 $P=0.388$ ）、女性の実施時期（フィッシャーの正確確率検定、 $P=0.462$ ）、および男女間（フィッシャーの正確確率検定、 $P=0.504$ ）で有意差は見られなかった。

表1 男性の学校での避妊教育の種類

	避妊法の種類	避妊法の使用法	妊娠反応検査
小学校	18	10	3
中学校	65	37	12
高等学校	26	20	1

表2 女性の学校での避妊教育の種類

	避妊法の種類	避妊法の使用法	妊娠反応検査
小学校	19	13	7
中学校	80	65	13
高等学校	29	19	5

表3 学校での避妊教育の種類別の男女間比較

	避妊法の種類	避妊法の使用法	妊娠反応検査
男性	128	97	25
女性	109	67	16

今まで受けた避妊教育が役立ったかという満足度に関する質問項目に対する結果を表4, 5, 6に示した。避妊教育が役に立たないと感じているものは、男性16.2% (19人), 女性8.8% (13人)であった。避妊教育の時期と避妊教育が役立ったかどうかについて、男性では小学校36.8%, 中学校47.8%, 高等学校31.0%となり、中学校から高等学校へかけての減少が見られた。女性では小学校58.3%, 中学校47.3%, 高等学校43.3%となり、小学校から高等学校へかけて段階的に減少が見られた。しかし、男性(フィッシャーの正確確率検定, $P=0.2216$), 女性(フィッシャーの正確確率検定, $P=0.7281$), および男女間(フィッシャーの正確確率検定, $P=0.171$)で有意差は見られなかった。

表4 男性の学校での避妊教育の満足度

	はい	どちらでもない	いいえ
小学校	7	8	4
中学校	33	29	7
高等学校	9	12	8

表5 女性の学校での避妊教育の満足度

	はい	どちらでもない	いいえ
小学校	14	9	1
中学校	44	41	8
高等学校	13	13	4

表6 学校での避妊教育の満足度の男女間比較

	はい	どちらでもない	いいえ
男性	49	49	19
女性	71	63	13

実際に学校で受けた避妊教育の内容についての結果を表7, 8, 9に示した。学校教育で実際に使用方法が説明された避妊法は、男性では全体で基礎体温法40% (56人), 男性用コンドーム72% (101人), 経口避妊薬(ピル) 54.3% (76人)であった。女性では、全体で基礎体温法56.5% (83人), 男性用コンドーム77.6% (114人), 経口避妊薬(ピル) 70.7% (104人)が多かった。使用方法が説明された避妊法について男女差は認められなかった(X^2 検定, $X^2=12.41$, $P=0.259$)。

表7 男性の学校での避妊教育の内容

	避妊方法	基礎体温法	殺精子剤	ベッサリー	男性用コンドーム	女性用コンドーム
小学校	6	3	9	15	5	
中学校	34	16	30	60	25	
高等学校	16	9	11	26	7	

表7 つづき

IUD	不妊手術	性交中絶法	経口避妊薬	避妊フィルム	緊急避妊法
2	4	1	9	1	0
7	9	9	47	8	3
2	9	5	20	3	1

表8 女性の学校での避妊教育の内容

	避妊方法	基礎体温法	殺精子剤	ベッサリー	男性用コンドーム	女性用コンドーム
小学校	15	2	6	17	10	
中学校	51	19	32	70	45	
高等学校	17	6	12	27	12	

表8 つづき

IUD	不妊手術	性交中絶法	経口避妊薬	避妊フィルム	緊急避妊法
3	11	5	16	3	2
15	22	14	64	15	3
5	6	5	24	7	2

表9 学校での避妊教育の内容の男女間比較

避妊方法	基礎体温法	殺精子剤	ベッサリ	男性用コンドーム	女性用コンドーム
男性	56	28	50	101	37
女性	83	27	50	114	67

表9 つづき

IUD	不妊手術	性交中絶法	経口避妊薬	避妊フィルム	緊急避妊法
11	22	15	76	12	4
23	39	24	104	25	7

家庭における避妊教育を受けているものを調べたところ、男性8.6% (13人)、女性12.9% (20人)であった。

家庭での避妊教育が、実際に役立ったかという満足度に関する質問項目に対する結果を表10, 11, 12に示した。避妊教育の時期と避妊教育が役立ったかどうかについて、男性(フィッシャーの正確確率検定, $P=0.513$)、女性(フィッシャーの正確確率検定, $P=0.762$)、および男女間(フィッシャーの正確確率検定, $P=0.739$)で有意差は見られなかった。しかし、「いいえ」と回答しているものは男性7.7% (1人)、女性10% (2人)であった。

表10 男性の家庭での避妊教育の満足度

	はい	どちらでもない	いいえ
小学校	1	3	0
中学校	2	1	0
高等学校	3	1	1

表11 女性の家庭での避妊教育の満足度

	はい	どちらでもない	いいえ
小学校	3	0	0
中学校	5	1	1
高等学校	5	4	1

表12 家庭での避妊教育の満足度の男女間比較

	はい	どちらでもない	いいえ
男性	6	5	1
女性	13	5	2

家庭での避妊教育の内容を調べたところ、避妊法の種類については、男性69.2% (9人) 女性55% (11人)、避妊法の使用方法については、男性23.1% (3人) 女性50.0% (10人)であった。使用方法が説明されている避妊法について、基礎体温法は男性0% (0人)、女性35% (7人)、男性用コンドームは男性53.8% (7人)、女性75% (15人)、経口避妊薬(ピル)は男性15.4% (2人)、女性25% (5人)であった。

考察

日本性教育協会(2001)によれば1974年から1999年の大学生での今までに性教育を受けたことがある割合は、男性では21.0%から59.4%、女性では25.4%から59.3%へと増加している。また、性教育実施率は1974年の調査では男女差があったが、1999年の調査では男女差が少なくなっているとしている。関塚ほか(2001)でも、大学入学以前の性教育について、83%が避妊に関する教育を受けているとしている。今回の調査はこれらを支持し、高等学校までの学校での高い避妊教育の実施率と性教育の実施率の男女差の解消を示唆している(男性=93.4%、女性=95.5%)。

これに対して、今回の調査で家庭での実施率は非常に低いことが明らかになった。これは、石沢(2002)が指摘するように家庭では性について話し合う機会が少なく、保護者側からも積極的に話題にしないことが原因になっていると考えられる。また、家庭では、避妊教育といった具体的な内容を取り入れられることは難しいことも原因と考えられる。しかし、家庭での避妊教育を受けている者の人数自体は少数だったものの、女性に関しては役立ったと感じる者が多かった。もちろん学校での避妊教育の重要性が薄れることはないが、今後家庭教育についても改善していくべきであると

考える。

受講時期は、中学校が多く、高校のみ、あるいは全く避妊教育を受けていない者も存在した。初交の低年齢化が指摘されているような状況の中では（日本性教育協会，2001），これを改善するようにしていかなければならない。一方で，小学校教育において避妊教育は「過激な性教育」が問題になる場合もある。適切な形で，早期実施できるような教育指針を明確に示していく必要があると思われる。

説明された避妊方法については，男性は基礎体温（40%），男性用コンドーム（72%），ピル（54.3%），女性は基礎体温（56.46%），男性用コンドーム（77.6%），ピル（70.7%）という結果が得られており，男女間で内容に差はないことがわかった。以前は性教育が男女別に行われていたのに対し，近年は男女一緒に性教育が行われることが多いことが，主な原因であると考えられる。このように避妊教育について男女間に差がないことは，男女ともに等しい知識を共有でき，両者間で性について討議することも可能になり，好ましい傾向であると考えられる。

日本性教育協会（2001）の調査では，性について知りたい内容で，避妊の方法は第7位（22.9%）であったが，第1位のエイズ・性感染症の知識（31.6%）と10%以内の差異となっている。また，年代別に見ると，中学生男子（11.6%）女子（14.6%），高校生男子（24.5%）女子（29.8%），大学生男子（27.9%）女子（41.8%）という結果がでており，年齢が上がるごとに知りたい

という要望が高くなっていることがわかる。しかし，今回の調査における性教育の満足度を比較すると，有意差はないが高等学校での満足度が一番低くなっており，生徒の要望に対して，十分な教育がなされていない可能性が示唆される。小・中・高で教育内容を検討し，各段階での生徒のニーズに対応した教育内容にしていくことが今後必要であると考えられる。

謝 辞

今回研究を行うにあたり，ご協力をいただきました対象者の皆様ならびに信州大学医学部保健学科の坂口けさみ教授に心から感謝の意を表します。

引用文献

- 石川英二（2002）学校での性教育で助産婦は何を
にええるか，助産婦雑誌 55，27-31.
- 文部省（1999）学校における性教育の考え方，進
め方．ぎょうせい，東京．
- 日本性教育協会（2001）「若者の性」白書第5回
青少年の性行動全国調査報告．小学館，東京．
- 小田切明徳（1992）性をしなやかに．かもがわ出
版，京都．
- 関塚真美・笹川寿之・坂井明美・尾崎由佳・小西
一代・高井久実子・清水美香（2002）看護学生
の性意識・性行動の実態とHuman
papillomavirus / Chlamydia trachomatis
感染との関連性．思春期学 20：169-173.